

# 南方熊楠全集

2

# 南方熊楠全集

## 2

平凡社

南方熊楠全集（全一〇卷）  
第二卷 南方閑話・南方隨筆他

定価 二八〇〇円

昭和四十六年四月二七日 初版第一刷発行  
昭和四十七年二月二四日 初版第三刷発行

著者 南方熊楠

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四番地  
郵便番号 一〇二  
電話 二六五〇四五  
振替 東京 二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社  
製本 株式会社石津製本所

© 岡本文枝 1971

0339-429020-7600

## 凡 例

一、本全集は、南方熊楠が公表した論考、随筆、英文著述、ならびに未公表の論考、手稿類などを集大成することを期した。したがって生前刊行された『南方閑話』『南方随筆』『続南方随筆』の三冊の単行本、および死後刊行された乾元社版『南方熊楠全集』に比し、以下の諸方針により、大幅に増補されている。

1. 国内で、著書として、あるいは雑誌に発表された文章は、内容がはなはだしく重複する一、二の例外を除き、すべて収録する。また新聞に掲載された文章も、主要なものは収録する。

2. 外国の刊行物に発表された英文著述および未公表の英文論考の主要なものは原文で収録する。その校訂には監修者の一人である岩村忍が当たる。

3. 書簡は、学術的および伝記的に重要な内容をもつものを、入手しうる限り、完全な形で収録する。

4. その他、未公表の論考、手稿類、日記の一部、年譜、著述目録索引を付載する。

5. 以上の諸資料のほとんどは南方家に所蔵されていたもので、それらの整理には監修者の一人である岡本清造が当たる。

二、表記は原則として「現代かなづかい」に改め、送りがなも（有た↓あつた 名く↓名づく 息ず↓息ます などのように）読解の便をはかって付加し、大部分の接続詞、副詞、助詞なども、漢字をかな書きに改めた。また、カタカナ・漢字混交文は、特殊な植物学論文（横書き）を除き、ひらがな・漢字混交文に改めた。

三、漢字は、当用漢字、同補正案、人名用別表にある字体は、これを使用し、また一部の俗字、同字などで現在常用されないものは、通用のものに改めた（恠↓怪 耻↓恥 咀↓詛 など）。ただ、著者独特の書きぐせである用字、用語は、肉筆手簡、初出雑誌などと校合のうえ、残したものが少なくない（たとえば愛憎（愛想）、居多（許多）などの用語はそのまま残し、臆と憶、希と稀、注と註の混用などはあえて統一しない）。

四、引用文は、著者が内容をとって略述し、あるいは書き改めたと思われる場合を除き、可能な限り原典と照合、校訂した。また漢文の引用文は「読み下し文」に改め、この部分は、一般の「」に対し小さい「」で区別した。読み下しには飯倉照平が当たり、監修者の一人である入矢義高が校閲した。

五、外国人名・地名などの固有名詞および若干の普通名詞で、現在常用されない漢字表記は、カタカナに改めた。ただし、初出にルビを付した出典名は漢字表記のままとした。また、これらの出典の訳名および当初からのカタカナ表記は論文によってかなり異同があるが、これらは少数の例外を除いて、同一論文内で統一するにとどめた。なお、チ↓ジ ツ↓ズ などの書き改めは行なった。

六、書名および雑誌名には『』、論文名には「」を付し、欧文では、著者が多く用いた方式に従い、書名は、論文名は、に統一した。なお巻号数、頁数を表わす漢数字は、十方式を用いず一〇方式とした。

七、ルビは、既刊文献にあつて著者独特の読みぐせと思われるものは、これを生かし、さらに一般の難読語にも、なるべくルビをつけた。句読点、改行、字下り、小字の扱いなどは、読解の便をはかってあらたに整理した。

八、既刊文献における削除部分、欠字および伏字は、可能な限り復原した。なお、原典の欠字と判明したものは□□、復原不可能の箇所は××で残した。

九、本文中の校注補訂は（ハ）をもつて示し、著者の手沢本・手沢雑誌における書き込みを本文中に挿入した場合は、【著者書（きこみ）】と特記した。また、各論文の発表または執筆年月日、掲載雑誌または新聞名、巻号数は、文章の末尾に付記

した。以上の諸校訂には飯倉照平が当たった。なお、特に必要な場合には、使用したテキストに関し、論文の末尾に注記を付した。

本書（第二巻）には、著者の生前に刊行された左記の三冊の単行本所収の論考・随筆を収録した。

『南方閑話』

（大正十五年二月 坂本書店刊）

『南方随筆』

（大正十五年五月 岡書院刊）

『続南方随筆』

（大正十五年十一月 岡書院刊）

ただし、「人柱の話」は『南方閑話』と『続南方随筆』の双方に収録されているが、後者の方が増補・改訂されて定稿と考えられるので、これを収録することとした。『南方随筆』の付録として収められている「郷土研究記者に与るの書」は本全集第三巻に収録するため、また『続南方随筆』の「再び昆沙門について」は、その大部分が本全集第一巻の「鼠に関する民俗と信念」第四節に収録されているので、その残余は同じく本全集第三巻に収録するため、それぞれ本巻では割愛した。なお、『続南方随筆』の「驚石考」を割愛したのは、全く紙幅の都合によるもので、読者の御寛恕を乞う。この論考は本全集第十巻に収録される。また上記三冊の単行本には、それぞれ編者の序、小記、後記などが付されているが、これらはすべて省略した。

iii 凡 例

底本には著者手沢本を用い、それぞれの文章について、掲載雑誌と対校した。『南方閑話』では掲載雑誌名・掲載年月日が記されていないが、本巻ではこれを付記した。『南方随筆』と『続南方随筆』とでは、同一テーマの雑誌掲載短文を、【追記】【増補】等の形で多数収録している。本巻編集にあたって、これらをすべて収録するほか、さらに同種のもの若干を追加し、その旨後注を付した。また、単行本編集にあたって著者が新たに加筆した追記や増補は、【増補】または【著者増補】と特記するか、追記文の末尾に、（大正十五年九月記）のように、加筆年月日を付記することとした。

なお、配列は原則として原本に従ったが、『続南方随筆』の「郷土研究第一卷第二号を読む」および「郷土研究一至三号を読む」は、『南方雜記』の中から取り出して、全篇の末尾に配置した。

目

次

## 凡例

## 南方閑話

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 伝吉お六の話                | 5   |
| 犬が姦夫を殺した話             | 18  |
| 死んだ女が子を産んだ話           | 24  |
| 神様の問答を立聞きした話          | 33  |
| 巨樹の翁の話                | 38  |
| 妖怪が他の妖怪を滅ぼす法を洩らした話    | 65  |
| 大岡越前守子裁判の話            | 68  |
| 南方随筆                  |     |
| 本邦における動物崇拜            | 77  |
| 小児と魔除                 | 99  |
| 西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語 | 121 |
| ペルー国に漂着せる日本人          | 136 |

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 廁 神                | 140 |
| 四神と十二獸について         | 147 |
| 詛言について             | 159 |
| 牛王の名義と烏の俗信         | 167 |
| 竜燈について             | 195 |
| 今昔物語の研究            | 223 |
| 俗 伝                | 248 |
| 山神オコゼ魚を好むということ     | 248 |
| け出づとの迷信            | 259 |
| 通り魔の俗説             | 267 |
| 臨死の病人の魂、寺に行く話      | 273 |
| 睡眠中の人を起こす法         | 274 |
| 魂空中に倒懸すること         | 268 |
| と 274 鯤鵬の伝説        | 275 |
| 神狼の話               | 276 |
| 千年以上の火種            | 277 |
| 親が子を殺して身を全うせしこと    | 277 |
| 塩に関する迷信            | 278 |
| 田螺を神物とすること         | 279 |
| 水の神としての田螺          | 280 |
| 女の本名を知らばその女を婚しうること | 282 |
| 桃太郎伝説              | 282 |
| アイヌの珍譚             | 283 |
| 鼈と雷                | 286 |
| 泣き仏                | 291 |
| 塩を好まぬ獣類            | 292 |
| 人を驢にする法術           | 292 |
| 葦をもつて占うこと          | 293 |
| 富士講の話              | 294 |
| 猫を殺すと告げて盗品を取り戻すこと  | 296 |
| 琵琶法師怪に遭う話          | 296 |
| 孝行坂の話              | 297 |
| 幽霊の手足印             | 299 |
| 鳴かぬ蛙               | 303 |
| 眼と吭                | 296 |

|           |     |
|-----------|-----|
| に仏ありということ | 304 |
| 山の神について   | 307 |
| 蛇を駆逐する呪言  | 309 |
| 親の言葉に     |     |
| 背く子の話     | 310 |
| 河童について    | 313 |
| 河童の薬方     | 313 |
| 生駒山の天狗の話  | 315 |
| 熊野の       |     |
| 天狗談について   | 316 |
| 子供の背守と猿   | 317 |
| 時鳥の伝説     | 318 |
| ウジともサジとも  | 321 |
| 紀州俗伝      | 322 |

# 続南方随筆

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 鳥が人に生まれし話         | 367 |
| 十三塚のこと            | 369 |
| 火斉珠について           | 370 |
| 古き和漢書に見えたるラーマ王物語  | 379 |
| 磬―鰐口―荼吉尼天         | 387 |
| 大三輪神社に神殿なかりしということ | 394 |
| 鏡磨ぎに石榴を用いしこと      | 396 |
| 釘ぬきについて           | 397 |
| 屍愛について            | 409 |
| 女性における猥褻の文身       | 419 |

徳川家と外国医者 ..... 420

人柱の話 ..... 421

明智左馬介の死期 ..... 439

婦女を姦童に代用せしこと ..... 440

千人切りの話 ..... 445

淫書の効用 ..... 456

奇異の神罰 ..... 457

話俗随筆 ..... 461

盗人、灰を食いし話<sup>461</sup> 一休、他人の手を仮りて悪童を懲らせし話<sup>464</sup> 梶子花

の兇戯<sup>467</sup> 爪切ること<sup>467</sup> 感冒<sup>467</sup> 蟻を旗印とせし話<sup>468</sup> 羊を女の腹に画きし

話<sup>469</sup> 糊の滓<sup>471</sup> 無眼、一眼、二眼<sup>471</sup> 米糞上人の話<sup>473</sup> 蛇を引き出す法<sup>474</sup>

武辺手段のこと<sup>479</sup> 錢孔に油を通す<sup>481</sup> 瓦工は不吉の営業<sup>482</sup> 孕婦、廁の掃除<sup>482</sup>

忠を尽して殺された話<sup>483</sup> 駕籠舁き互いに殺さんと謀りし話<sup>484</sup> 虫を掻き出し

て病を療ず<sup>485</sup> 平賀源内機智の話<sup>487</sup> 山獺みずから罌丸を噛み去る<sup>488</sup> 正直者、

金拾いし話<sup>490</sup> 蟻の道<sup>492</sup> 寂照飛鉢の話<sup>492</sup> 銀杏樹と女の乳との関係<sup>495</sup> 紀州

の民間療法記<sup>496</sup> 化け地蔵<sup>500</sup> 熊が悪人を救いし話<sup>501</sup> 錐揉み不動<sup>503</sup> 石田三

成<sup>504</sup> 遠い火災を救うた人<sup>505</sup> 水銀の海<sup>507</sup> 怒らぬ人<sup>508</sup> 少しばかりを乞うて  
 広い地面を手に入れた話<sup>510</sup> ウガという魚のこと<sup>514</sup> 魚の眼に星入ること<sup>516</sup>  
 夙慧の児、大人を閉口させた話<sup>516</sup> 母衣<sup>517</sup> 長柄の人柱<sup>522</sup>

## 南方雜記

善光寺詣りの出処<sup>524</sup> 野生食用果実<sup>526</sup> お月様の子守唄<sup>528</sup> 山人外伝資料<sup>529</sup>  
 塩食わぬ人<sup>533</sup> 影の神秘<sup>533</sup> 山婆の髪の毛<sup>535</sup> 「熊野雨乞い行事」を読み<sup>536</sup>  
 池袋の石打ち<sup>537</sup> 御伽という語<sup>538</sup> 鹿杖について<sup>539</sup> 鴻の巢<sup>541</sup> 針山供養針千  
 本<sup>544</sup> 実盛屋敷<sup>545</sup> 山神の小便<sup>545</sup> 松山鏡の話<sup>546</sup> ヒジリという語<sup>547</sup> 天狗の  
 情郎<sup>549</sup> じょうりきじょうまん<sup>552</sup> 蟹噛みについて<sup>552</sup> トウボシは唐乾飯なり  
 557 柳の祝言<sup>560</sup> 諸君のいわゆる山男<sup>562</sup>

## 『郷土研究』第一卷第二号を読む

## 『郷土研究』一至三号を読む

## 海老上臈

## こちら側の問題

益田 勝実

南方熊楠全集 第二卷



# 南方閑話

